
バレンタインデー

子猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタインデー

【Nコード】

N1584G

【作者名】

子猫

【あらすじ】

高校二年生ももうすぐ終わる。今日はバレンタインデーだ。毎年このことだけど、クラスの男子の様子がいつもとは違う。そんななか昼休みの屋上で、弟が告白されているところを見てしまった。

第一話：初恋のバレンタイン

「冬樹！いつまで洗面台の前に立ってんの？」

起きたばかりの俺はいつまで経っても髪をいじっている弟をうながす。

「うっせーよ兄貴！俺は兄貴と違ってちゃんと髪とかに気を使ってるの！そんなんじゃないよいつまで経っても彼女できねーぞっ」

「んなこと言ってるご本人様も今は彼女がいなくせに・・・」

「・・・なんかいつたか？」

俺の言葉に冬樹はこつちを睨め付けてきた。

「いや・・・なんでもない」

「・・・よしと！これで完了！行ってきまーす！」

洗面台を後にして、冬樹は走って玄関を飛び出していった。

「いくら今日がバレンタインデーでも、起きるの早すぎだろー」

冬樹の姿を見送りながら、俺は呟いた。そして、時計に目をやる。

その時刻を見て俺は愕然とする。

「やっべ！あと10分だ！」

焦りを感じた俺は着替えを5分で済まし、朝食を食べて、家を飛び出した。

俺は浅川春樹。高校二年生だ。弟の名前は浅川冬樹で、同じく高校二年。つまりは双子ってことだ。一卵性で顔のパーツはそっくりなんだけど、冬樹は俺と間違えられるのが嫌なようだから、中学にあがったところから髪の毛を立たせている。でも漢字で書くと一文字違いのせいかな、今でも名前をよく間違えられてしまう。中学まではサッカー部にはいつていて、冬樹も同じチームのレギュラーでインズ浅川ってうちの学校のやつらには言われてた。部活を引退して高校受験に向けて勉強とかして忙しくなってるうちに、俺も冬樹もサッカーとは関わらなくなっって、いつのまにか興味もそれほどなく

なっていた。テレビ中継とかでたまに見ると応援したりするけど、もうゲームを見にいってほど熱中しなくなったな。

今日の冬樹がなんでこんなテンション爆発中なのかと言うと、今日は2月14日、つまりバレンタインデーだからだ。一週間くらい前から冬樹は来週はバレンタインだぞー！、と喋って騒いでいた。一週間前なんてもう女の子は誰にあげるか決めちゃってるでしょ、と言っても、

「いや！絶対一週間で気が変わる人もいるんだからね」

と言って洗面台に向かっていた。俺はバレンタインデーだからと言ってテンションあがるような性格じゃないしあんまり気にしてなかったけど、冬樹にとってはクリスマスより正月よりも自分の誕生日よりだって重要な日のような日だった。本当、呆れるね。

かと言って俺もいままでバレンタインデーにチョコをもらったことがない、というわけでもない。去年は中学三年のときから同じクラスだった女の子がくれたんだけど、アリガトウって片言みたいに言って特にそれ以上の進展はなかったね。ちゃんとホワイトデーに返したよ、クッキー焼いたら冬樹に睨まれたけど。あいつはあのときもらえなかったのかな。たぶんそれだから去年以上に張り切ってるんだと思う。あいつは女子とよく喋ってるし、もらってもいいんだと思うけどな。そういや冬樹、彼女いたっけ……。あ、中三のときにいたって言ってたな。二ヶ月付き合ってたけど終わりだったけど。それに半分はメールのやり取りもしなくなってる事実上一ヶ月だったけど。あの時冬樹はなんか悲しそうってわけでも無い様に見えた。たぶん女の子に告られてウンっていうしかなかったんだろうけど。あいつは人のいうこと、断りづらいみたいだし。

俺はまだそういうの、ない。中学のときなんて部活で青春、終わったら受験勉強で必死こいてやってたし。それに冬樹と違って女子とは滅多に話さない。話すのが嫌いっていうわけじゃない。でも、ただ苦手なんだよね……。何話せばいいかわかんなくてさ。共通の話題とか見つかるといいんだけど、そういうのっていろいろ話

してかないと見つからないんだよね。

俺が昇降口についたところにHR開始のチャイムが鳴った。あーもうだめだな……。まあ、あんま気にしないけどね。週に二回は遅刻するし。

教室に着いたら教室が騒がしかったからどうしたのかと思っただら先生がいない。チャイムが鳴って五分経ってるのに。まあ、ラッキー、ってことで。

俺が席についたら隣のやつが話しかけてきた。

「おい、浅川。お前もうもらった？」

「……へ？」

何のことか一瞬わからなくなって間の抜けた返事をした。

「へ？じゃねえよ。チヨコだよチヨコ。」

ああ、なんだそんなことか。男子は何でそんなことにはっぴり興味もつんだらうね。まあ……。俺はちよつと持たなさすぎかもしれないけど。

「あのなあ、俺は遅刻組みだぞ。わざわざ遅刻する俺を待つて朝にチヨコを渡す女子がいるのか？」

「だって、下駄箱とかロッカーとかその辺に入れられてるかもしれないじゃん。もしかして机の中かもよ？」

そういわれると机の中が気になってくる。そういえばまだ机の中は見えないな……。でもそんなこといわれたと勝手に机の中とかみたらなんかわざとらしそうで……。いや、もういい！見てしまえばいいよ！

そして俺は机の中を手で探してみた。最初ちよつと指にあたるものがあった、もしかして……。思ったら、ただの消しゴムだった。

「ないない、俺はまだもらってないよ。」

「そうかーそうだよ……。」

「そう言うお前はどうかだよ？」

といったと勝手にそいつの顔が赤くなった。

「へ？お、俺？俺はその・・・」

「なんだよ隠さなくなつていいじゃんかよー」
さらに俺は畳み掛けて吐かせた。

「・・・今朝もらつた。通学途中にさ。三組のコなんだ。」

「へー！おめでとさん。もう中身見たの？」

「バ、バカ！まだみてねえよ。ていうか見れねえよー」

そう言つて机に突つ伏した。HR終了のチャイムが鳴る。先生たちが来なかつたのは職員会議が長引いたからだと一時間目に言われた。だが一時間目の授業中、俺が考えていたのはHRでのことだ。そっか、もうもらつた人もいるんだな。冬樹ももうもらつたのかな？

午前中の授業が終わつて俺は昼飯を誘いに冬樹の教室に行つたのだが、教室に冬樹の姿が見当たらない。冬樹と同じクラスの男子に冬樹は？と聞いたら、屋上に行つてるらしいよ、と言われた。屋上つていえば、結構前に二人で弁当食べてたな。もしかして俺を誘おうと思つてすれ違つちやつたのかも。今日俺、急いでて弁当忘れたから食堂に行こうつて思つてたのに。とりあえず屋上に行つてみるか。

俺たちの学校の屋上は四階の上にある。俺達二年は三階に教室があるけど、近いようでは上るのは面倒だ。今はもう運動部じゃないし、階段上がると結構膝に来るんだよね。それで上り終わった後息とかきれちやつたりしておっさんになつちまつたなあつて思う。

そして階段を上りきつたらえ？つて思った。

最初冬樹の声がしたから誰かいるのかな？つて思つたら、しばらくしたら今度は女の子の声がした。嘘！？つて思つて反射的に隠れちやつた。それで、ちよつとドアを開けてみる。

青い空と雲がちよつと見えた。太陽の日差しが穏やかな感じでああ、もう春が来てんのかなつて感じがした。風がドアの隙間から流れ込んできて俺の頬に当たる。心臓の高鳴りを感じる。なぜならそ

こには顔を赤らめた女の子と、冬樹がいたからだ。二人の会話が聞こえてくる。

「急に呼び出しちゃってごめんね。浅川君も、ご飯まだなんですよ？」

「ああ、うん……。まあそうだけど」

本当にこういうときの冬樹って弱いよなって思う。声すつげえ小さい。いつもの三分の一以下だよ。そのまましばらく沈黙が続いた。そして、冬樹がとうとう口を開いた。

「それでさ……。何？話して」

「あ、うん……。ごめんね。昨日私ね、チョコ作ったんだよ。それでね浅川君に……。その……。食べて欲しいの」

「あ、ありがとう！俺、ちゃんとなんか返すから！」

浅川君って言われると俺にも言われてるみたいでなんかどきどきしちゃうんだよな。言われてるのは冬樹なのに。というか冬樹ももらったばかりなのにもうホワイトデーにお返しする話なんかしてどうするんだよつ！むこうは気にしてないみたいだけど。

「じゃ、じゃあ……」

と行って冬樹は立ち去ろうとする。そのとき彼女は慌てていった。

「あの！浅川君！それから……」

「え……。？」

「あ、あのう……。それで、もし浅川君付き合ってる人とかいなかったら……」

彼女はまっすぐ前を向いた。そして冬樹の目をしっかりと見つめた。

「私と、付き合ってくれませんか！」

そしてまた沈黙。さっきほどは長くなかったはずなのに、そのほんの十秒くらいの時間がすごく長かったように思えた。告白の間中、俺は心臓がバクバク鳴って動けずにその場で固まっていた。

「えつとあの、まだそんなにすぐについて言うのは……。ごめん、返事はもうちょっと待っていてくれない？」

「あ、はい！いいです。今日は気持ち伝えただけなんで……」

あの、失礼します！」

え・・・？彼女の声にはつと目が覚めた。やべえ！走ってきてるし！逃げるぞ、俺！

汗をすっげえかいてる。それは走って逃げてきたからじゃない。弟が告白されているところを兄の俺が見てしまったからだ。元を言えば俺が悪いつてわけじゃないんだけど、やっぱりあんなところ見ちゃうと少しは罪悪感みたいなのを感じてしまう。あーっ！こんなじゃ冬樹とまともに顔をあわせらんないよ。

教室に着いたら腹が鳴った。そういえばまだ昼飯食ってないな。時間的に食堂はもう無理だし、パンでも買って食うとするか。

昼休みも午後の授業もまた適当に過ごして、もう放課後になった。今日は冬樹とは帰らない。今は会いたくないっていうのもあるけど、二日ほど前から冬樹がバレンタインの日には登下校一緒にしねえから、って言うてたからだ。なんでだよ、って言うたら登下校中に兄貴といたらチョコを渡されにくいだろ、だってさ。本当、そこまでこだわることかね。

一人で歩いて帰るのもたまにはいいかもね。しゃべれないのが暇だけど、なんかこうして空でも眺めながら自分のペースでゆっくり歩くってというのが結構気に入って。一人だし公園でも寄るかな。

公園にいるのは俺だけだ。ベンチに座って空を見上げる。風が俺に向かって吹いてくる。屋上よときの風と違ってひんやりとしていて冷たい。思わず手をこすってしまふ。なんであんなとこタイミング悪く見ちゃったのかね。本当、最悪だよ。でも冬樹も、やっぱりモテるんだね。あんなかわいい子に告白されちゃったりしてるんだもん。

公園の外にふと目をやると、女の子がこっちを向いていた。え・・・？あの子って確か・・・

やっぱりそうだった。

屋上で冬樹に告っていたあの子だ。俺が手を振るとこっちにやってきてコンニチワ、と挨拶をしてきた。

「あの・・・俺に何か用？」

「浅川君、だよな？お兄さんの。本当、そっくりだね。浅川君と。」
俺のことも浅川って呼ぶなよっ！と突っ込みたくなつたがやめとい
た。

「まあ、双子だからね。俺は春樹だよ。」

「あ、うん。そうだね、それで冬樹君のことなんだけど・・・」
弟の名前を急に呼ぶもんだから驚いた。まあそんなことだろうと思
つたけど。

「冬樹がどうかした？」

俺は屋上でのことは見てなかったということにして話すことにした。

「うん、私ね・・・今日冬樹君にチョコあげて、それで告白しちゃ
つたんだ」

「え？そうなんだ・・・冬樹にね・・・」

「それでお兄さんの春樹君にも知っておいてほしかったんだ。」

「へえ・・・そう・・・」

「やっぱり、嫌？」

「ううん、それは冬樹の決めることだし」

そう、これは俺の問題じゃない。この子と冬樹の問題なんだ。だから俺には関係ない。でもなんだろう・・・この何か大事なものを失くしてしまつたみたいな感じ・・・

「そう・・・だよな。ありがとう春樹君。それじゃあね！」

バイバイと手を振って彼女を見送った。

不思議な子だなんて思った。わざわざ言いに来ないよな、普通。
いくら兄だからといつてもさ。

家に帰ったらなんだか普通にいつもみたいに冬樹と話せた。冬樹も屋上でのことをわざわざ話そうとはしなかった。

冬樹はあの子のことどう思ってるのかな。やっぱり付き合うことに

するのかも。嫌いでもない人を傷つけるようなことは冬樹には絶対にできないから。

優しいんだよな、冬樹は。いつも毒舌はいてるくせに、普段からは想像もできないくらいに優しくして頼りになることがいくつもある。

今回だって冬樹ならうまくやってくれるさ、きっと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1584g/>

バレンタインデー

2010年10月17日06時44分発行